

「五葉山の魅力」

五葉山自然倶楽部
創立10周年に寄せて

③1

二〇〇一(平成十三)年九月は、私にとって忘れられない年月となっています。その年の六月、週休二日制となった小学生を対象に、地域の教育力を生かして、三つの塾(後に四つ)が開講されました。

スミタ・コミュニティー・スクールです。住田の昔話をもとにして、大型紙芝居を作ろうという「お話塾」に、私もお手伝いすることになりました。

同年九月八日、スミタ・コミュニティー・スクール合同の野外活動で種山高原に出かけました。野外炊飯などの諸行事のあと、頂上へ、そして遊林ランド種山へと下りました。

一年生から六年生まで二十数名の子どもたちは、またなんとなく互いにぎこちなかったり、よそよそしかったりしていました。高原を吹き渡っていく風は、夏の名残の日射しをやわらげ、心地よく感じられました。種山の頂上の、太古からあった硬く大きな岩々。子どもたちはその上へのぼり、三六〇度の広がりを感じていました。

森に知る「生きている存在」

住田町世田米 菊池 ユウ子

と、友だちのこと、代わることができる話をしています。アカマツやカラマツの落葉が足元を柔らかく包んでくれる道を下り、木々のいいにおいのする林をぬけて行く間に、子ども同士、すっかり打ち解けていました。それから三日後の九月

ブナの林で命の水がめぐっている音を聞こうと、太い幹に耳をあてます。岩を割って伸びるヒノキアスナロの林では岩をたたいてみます。森の木々が貯めていた水が地下水となり、地上に出て小さな流れとなり、やがて水煙をまきあげて流れる沢となって、私たちの五感をさわやかに潤してくれているのをしっかりと皮膚で受けとめます。

自分たちをみつめている森の生き物たちを想像し、感じています。自分以外の命の存在を想像できるって、何と素晴らしいことでしょう。他の命の存在を忘れてしまふところから、種々の争いや事件、事故などが起こっていくような気がします。

【執筆者プロフィール】住田町世田米在住、六十四歳。元スミタ・コミュニティー・スクール講師。「お話塾」で昔話の紙芝居づくりを指導。読み聞かせボランティア「とんと」代表、自然農法研究会会員。

頂上を下り、草原を歩いていく子どもたちは、笑い合い、おしゃべりし合っています。いつの間にか、私の両手も子どもたちとつながっています。学校のこと、スポーツ少年団で困っているこ

十一日夜九時のニューース。ニューヨークのツインタワーに旅客機が突っ込んでいくリアルタイムの映像。

その後、二〇〇五(平成十七)年まで子どもたちにかかわり、二回の野外活動では五葉山麓のあすなる山荘まで行きました。

案内人の紺野寿美さんが、私たちの命を支えてくれる森の働きを静かに話してくれました。木の幹につけられた鋭い爪跡、落葉の上の糞、コブだらけの木ノナヅ、大きな木の根元のウロ、木の葉の裏の卵…。

それらから、私たち人間以外の命を持って生きていくもの存在を気づかせてくれます。子どもたちは、どこかでじっと

自分たちをみつめている森の生き物たちを想像し、感じています。自分以外の命の存在を想像できるって、何と素晴らしいことでしょう。他の命の存在を忘れてしまふところから、種々の争いや事件、事故などが起こっていくような気がします。

ニッシー エッセイ

「戦争はやだよー、戦争はやだよー」と言い続けていました。

静かな響きになってきています。道々さまざまの発見をし、大人たちと自然に交流が生まれていきます。

それらから、私たち人間以外の命を持って生きていくもの存在を気づかせてくれます。子どもたちは、どこかでじっと



笑い合い、しゃべり合い、みんながつながり打ち解けていく。森は心を優しくする＝五葉山麓「ブナの広場」で(右が筆者)